

初診の遷延性・慢性咳嗽患者における喀痰の出現頻度の検討

細井慶太、原 彩子、菅 泰彦、出上裕之、原 聡志、木下善詞、関 庚煒
市立伊丹病院 呼吸器内科

【背景】「咳嗽に関するガイドライン」の診断フローチャートでは、喀痰を伴う場合には副鼻腔気管支症候群を考慮することになっている。しかし、咳喘息やアトピー咳嗽でも喀痰を伴うことはよく経験する。

【目的】遷延性・慢性咳嗽症候群における喀痰の有無の臨床的意義を検討すること。

【対象と方法】2006年4月より遷延性・慢性咳嗽を主訴に当院呼吸器内科を受診した患者のうち診察所見や諸検査が正常で電子カルテで詳細な問診が得られた117例を対象とした。呼吸器学会の「咳嗽に関するガイドライン」の簡易診断基準に基づき鑑別診断を行い、問診による喀痰の有無を調べた。

【結果】初診時の問診で喀痰の出現頻度は、副鼻腔気管支症候群 8/13例 (61.5%)、咳喘息 35/61例 (57.4%)、アトピー咳嗽 5/15例 (33.3%)、胃食道逆流 1/5例 (20%)、感染後咳嗽 5/10例 (50%)、咳喘息+胃食道逆流 7/13 (53.8%) であった。喀痰出現だけの、副鼻腔気管支症候群における感度は61.5%、特異度は49.0%、尤度比(陽性)は1.20であった。更に詳細な問診(「膿性痰あり」もしくは「後鼻漏あり」)を加えると、感度は92.3%、特異度は73.4%、尤度比(陽性)は3.47であった。

【結論】成人の遷延性・慢性咳嗽患者において、喀痰は様々な疾患で出現するので鑑別診断における有用性は限られる。しかし、より詳しい問診を行い、膿性痰の有無やその他の症状(後鼻漏など)を組み合わせることで鑑別診断に有用になる。